

王政 著『五四女性：現代中国女権主義先行者』

香港中文大学出版社、2025 年

中文版 序

https://sites.lsa.umich.edu/wangzheng/2025/06/25/women-in-the-chinese-enlightenment-2025-preface/

本書の英語原著の初稿は、私が 1995 年に完成させた歴史学博士論文に遡る。1999 年にカリフォルニア大学出版局から刊行されると、英語圏の学術界から大きな注目を集めることとなった。その理由は、本作が社会学的ジェンダーの視点から五四運動期を検証した初の歴史学的著作であったからである。また本書は、私が五四運動期を生きた女性たちに対して行ったインタビューを主要な一次史料として、20 世紀前半における中国フェミニズムの発展の軌跡を描き出している。本研究を完成してから今日まで、すでに 30 年の歳月が流れた。このたび香港中文大学出版社より中国語版が刊行されるにあたり、感慨深いものがある。当時、一介の学生として本研究に注いだ努力は、今なお鮮明に記憶に残っている。中国語圏の読者諸賢も本書の執筆背景に関心を抱かれることと考え、ここに「個人の学術的小史」という形式を借り

て、私がいかにしてこの領域へと足を踏み入れたのか、本研究が私個人にとってどのような意味を持つのか、そして 30 年前の自著に対する今日的省察について述べたい。

フェミニズム史学に対する無知から心酔へ

1985 年、私はカリフォルニア大学デービス校歴史学部に合格し、米国史専攻の修士課程に入学した。渡米直前、私は米国のフルブライト文化交流プログラムが中国で開講していた大学教員養成コースで一年間米国史を学んでおり、修了論文のテーマに「米国の職業婦人」を選んでいた。おそらくその当時、大学の若手女性教員であった私は、キャリアと私生活の両面において困惑と迷いを感じており、米国の職業婦人の実態を知りたいと考えたのであろう。いずれにせよ、クラスで女性に関するテーマを選んだのは私一人であり、担当の米国人男性教授も講義で米国女性について触れることは一度もなかった。クラスのある教員は、私が米国女性を主題に論文を執筆し、まもなくカリフォルニア大学で米国史を学ぶ予定であることを知ると、私にある提案を持ちかけてきた。中国の米国史研究会の事務局長であった劉緒貽教授が、自身の主編する「米国史叢書」の一環として、米国女性運動史の執筆を私に依頼したいと考えているというのである 1 。当時、私は論文一本すら発表したことがなく、突如として著書の執筆依頼を受けたことに恐縮しつつも、即座にこれを引き受けた。歴史学部に進学届を出す際、私は迷わず米国女性史を専門とする教授を指導教官に選び、研究領域も必然的に女性史に決定した。当時の選択はあくまで執筆依頼という任務を遂行するための考慮に基づくものであり、自身が女性史学者になるとは露ほども考えていなかった。その段階で私が最も強い関心を抱いていたのは比較文化研究であり、関連科目を数多く履修した結果、後に学際的な「社会理論および比較歴史学」プログラムの修了証書を取得するに至った。

予期せぬ展開であったが、米国女性史の諸講座を履修した際の感覚は、あたかも『紅楼夢』の劉姥姥が大観園に足を踏み入れたかのごとく、目にするものすべてが未知であり、新鮮な驚きに満ちていた。1985 年当時の米国における米国通史の講義では、すでに社会学的ジェンダー、階級、人種という三つの主要なカテゴリーを用いることが一般的となっていた。とりわけ女性史においては、フェミニズムの批判的理論概念が随所に体現されており、制度的・構造的不平等に対する分析は独創的な洞察に溢れていた。個々の専著はいずれも何らかの神話を解体し、あるいは先学の定説に異を唱えるものであった。こうした特徴が米国史学一般の共通項であるとするならば、女性史はさらに独自の視点から、伝統的史学が看過してきた領域を照射していた。米国通史を学ぶ過程で、私は「歴史とはこのように記述することが可能なのか！」という、蒙を啓かれる思いを抱いた。さらに女性史の研究に触れるに至り、中国の学術界が未だ着想だにしていなかった領域において、彼女たちが筆を櫛（くし）のように用いて、歴史を細部に至るまで精緻に検証し尽くしている事実に、深い感慨を禁じ得なかった。婚姻、家事、出産、育児、性的活動、雇用、職業、政治参画、教育、社会運動、結社活動、娯楽。これら多岐にわたる、あらゆる人種・階級の女性の生の諸側面について、膨大な数の歴史学専著が詳細かつ多角的な解釈と検討を加えていた。これらの著作群は、高等教育機関における歴史学や女性学のテキストとして採用され、若い世代の新たな知識の基盤となっていたのである。私は米国女性史専攻の学生であると同時に、中国からの研究者という二重のアイデンティティを保持していた。そのため、中国の学術界・高等教育界との比較を通じて、米国のフェミニズム学術活動が社会文化の変革に果たす役割の大きさと、翻って中国におけるその空白を明確

に認識するに至った。米国女性史の専著を手に取るたび、胸の内に突き上げるような衝動を覚えた。「このような研究は、中国ではまだ誰も着手していない。しかし、私ならばそれができるはずだ」と。第二学年が終わるのを待たずして、私は決意を固めた。米国史の修士号を取得した後は中国史へと転身し、中国女性史研究に身を投じるということを。

中国女性を英語圏へ紹介するということ

幸運なことに、私が中国近代史専攻に転じ、博士課程での研究を開始したその年、スーザン・マン（Susan Mann）教授が本校の歴史学部へ着任した。彼女は米国の中国研究界において、女性史研究を推進する中心的な人物であった。そもそも米国の高等教育機関において中国史を講じる教授は決して多くはなく、まして中国女性史を専門的に指導できる者は極めて稀少であった。こうして私は、女性史学者の育成を自らの使命と任ずる博士課程指導教官を得るという、念願通りの順調なスタートを切ることができたのである。後年、私が中国国内の各大学で講義を行った際、女子大学院生たちが「男性の指導教官が女性研究というテーマをいかに否定し、反対しているか」を苦悩とともに吐露する場面にしばしば遭遇した。そのたびに憤りを感じると同時に、自分がいかに恵まれた環境にあったかを改めて深く再認識せざるを得なかった。

スーザン・マン教授が開講した中国女性史の講義を通じて、私は西洋の学者が長年にわたり蓄積してきた中国女性研究の成果に、瞬く間に接することとなった。西洋の学者による中国女性研究の専著を読み進めるなかで、私の抱いた感情は極めて複雑なものであった。地域的・言語的制約、さらには中国の政治環境による制限があるにもかかわらず、これほど多くの専門書が刊行されている事実は、執筆者たちの執念の証左であり、私はその探究精神に深く胸を打たれた。1980 年代当時の西洋における中国女性研究は、米国女性史の蓄積と比較すれば、対象領域は限定的であり、課題設定や分析の深化も十分とは言い難い側面があった。しかし、この種の学術研究は当時の中国国内には未だ存在していなかったのである。「中国の学術界は、一体いつになればこのような学術的成果を生み出すことができるのか」――私はその明白な格差を前にして、深い感慨と焦燥を禁じ得なかった。主要な数冊の著作は、中国共産党が主導した女性解放運動に対し、鋭い分析と批判を加えていた。それらの洞察には、示唆に富むものが数多く含まれていた。例えば、社会主義国家において「国家家父長制（State Patriarchy）」がいかに強固に構築されたかという分析や、女性解放が父系的な家族・婚姻制度の変革に至らなかった事実とその帰結に対する深い分析などが挙げられる。社会的ジェンダーの視点から中国史を問い直すことによって生み出されたこれらの新しい知見は、その独自の洞察力をもって私を深く震撼させ、啓発した。行間に躍動する独立した思考と批判的精神は、私を強く惹きつけて止まなかった。

しかし同時に、私はこれら大半の著作に対して、言語化しがたい不満を抱いてもいた。長らく思索を巡らせた末に到達した結論は、これらの著作における「中国女性の不在」に対する不満であった。1990 年代に入ると、米国のフェミニズム理論界の主流は西洋中心主義への省察へと向かい、人文学界全般においてポスト構造主義やポストコロニアリズムといった批判理論が台頭した。こうした大きな潮流の中で、私は西洋の中国女性研究が抱える問題をより鮮明に捉えることができたのである。彼女たちの長所が制度的・構造的な弊害の分析にあるとするならば、その短所は「制度を見て人を見ず」という点に集約される。その原因を究明すれば、一次史料による制約という明白な事実に突き当たる。長きにわたる中国の閉

鎖的な環境は、中国人の対外認識を疎外したのみならず、国外の人間による中国の実地調査をも困難ならしめた。その結果、中国研究の専門家といえども、当局の公刊物に依拠して分析・判断を下さざるを得ず、得られる中国像には自ずと大きな限界が生じ、一般民衆の実際の経験を提示するには至らなかったのである。しかし、中国女性研究において女性の能動性が十全に表現されてこなかったことには、より深層的な理由が存在する。すなわち、オリエンタリズムの影響である。西洋のフェミニズム学者であっても、この視座の限界から完全に脱却することは極めて困難であった。西洋のナラティブ（叙述）、とりわけ初期のフェミニズム的ナラティブにおいて、中国女性はその多くが「纏足（てんそく）」や「非識字」といった表象として記述されてきた。フェミニズム著作におけるこうしたイメージの強調は、女性が受けた抑圧の普遍性を説明するためのものであったとはいえ、同時に「中国女性＝弱者」というステレオタイプを強化する結果を招いた。こうした型にはまった言説は、一部の中国研究者の想像力を制約し、研究課題の設定において中国女性の能動性を模索することを主要な目的から除外させてしまったのではないだろうか。同時代に刊行された膨大な米国女性史の著作群とは対照的である。それらの米国女性史の中には、常に生気に満ちた、力強い女性像を見出すことができたからである。

米国女性史を学んだ背景を持つ中国人学生としての私は、かねてよりある種の不条理を感じていた。「中国の女性が米国の女性よりも脆弱であるなどと、到底信じがたい」という思いである。古来、中国には数多の「巾帼英雄（きんこくえいゆう：男勝りの英雄）」が存在してきたが、米国の一般大衆はその事実を露ほども知らない。私自身の人生経験においても、決して「弱者」には分類されない逞しい女性たちを数多く目にしてきた。そして私自身、己を弱者であると考えたことは一度としてない。それゆえ、米国において中国女性が「弱者」や「犠牲者」としてのみ表象されている状況を目の当たりにすることは、耐え難い苦痛であった。こうした私の鬱屈とした感情は、米国のフェミニズム学術界における「西洋中心主義への省察」や「オリエンタリズム批判」に触れることで、ある程度は解消の方向へと向かった。しかし、一つの強い執念だけは消え去ることがなかった。それは、「自らの筆を通じて、西洋の読者に中国女性の真の姿を知らしめたい」という切実な願いである。

フェミニズムの先駆者たちの足跡を辿って

1949 年以降の上海に生まれ、毛沢東時代に成長した一人の若き女性として、私は「中国共産党こそが中国女性の偉大なる救世主である」という公式な定説に疑問を抱くことはなかった。私の人生の歩みは極めて順調なものであった。家庭では両親の寵愛を受ける末娘であり、就学や就業の過程においても、女性であるという理由で差別を経験したことは一度もなかった。むしろ、女性であるがゆえに男性にはない「優遇」を享受した局面さえ何度か存在した。例えば、下放青年として農場で生活していた折、広州交易会の解説員に選抜されたことや、映画の主演に抜擢されたことなどが挙げられる。1977 年に全国大学統一入試（高考）が再開されると、私は中学二年生程度の学力で大学合格を果たした。在学中には上海市の「三好学生（品行方正・学習優秀・身体強健な学生）」に選出され、学生会副会長も務めた。卒業後はそのまま大学教員として採用されるに至った。私にとって自らの半生は、1949 年以降の中国女性がいかに解放されたかを体現する写し鏡のようなものであった。とりわけ、実母との対比は鮮烈であった。私の母は纏足を施された非識字者であり、許婚（いいなずけ）として父に嫁ぎ、九人の子を産み、生涯を家事に捧げた女性であった。母の姿は、私の目には共産党の宣伝工作に登場する「旧社会で抑圧された女性」

の典型像そのものとして映っていた。当時の私の認識において、「旧社会」において自己解放を成し遂げた女性が存在するなどとは、想像だにできなかったのである。

米国女性史の講義でフェミニズムの歴史を学ぶにつれ、私の中に次のような疑問が芽生え始めた。「米国のフェミニズム運動は常に女性たちの自発的な行動によって推進されてきた。翻って、なぜ中国の女性解放は『救世主』（共産党）の到来を待つだけの受動的なものとして語られるのか。救世主が誕生する以前、中国の女性たちはいったい何をしていたのか」と。中国女性史へと専門を転じた後、関連文献を通じて 20 世紀初頭の中国にもフェミニズム運動が存在していた事実を知った。しかし、それらの著作の多くは運動の系譜や詳細な経緯を追跡するまでには至っていなかった。渡米前、私は中国当局の公式のナラティブにおいて「失敗に終わったブルジョアフェミニズム運動」という規定を耳にしていた。国外の学者はこうした否定的な語彙こそ用いないものの、当時のフェミニズム運動の実態を十全に解明しているとは言い難い状況であった。米国の中国女性史研究における先駆者であるマリリン・ヤング（Marilyn Young）は、英語圏初となる中国女性研究の論文集の中で次のように問いかけている。「当時のフェミニズム運動活動家たちのその後の行方はどうなったのか。共産党に参加したフェミニストたちはどのような運命を辿ったのか。都市に留まったフェミニストたちはその後どうなったのか」と。私の知的好奇心はこれらの問いによって強く触発された。歴史の深層を突き止め、脳裏に渦巻く数々の疑問を解明したいという衝動に突き動かされたのである。

中国国内で一貫して受容してきた言説は、「ブルジョアフェミニズム運動は中国の事情に適合しなかったため、失敗に終わった」というものであった。しかし、米国におけるフェミニズム運動の検証を通じて私が理解したのは、運動が当初中産階級の女性たちによって先導されたとはいえ、そこで扱われた女性問題は、あらゆる階級や人種の女性たちの利益を包含するものであったという事実である。一世紀以上にわたる運動の持続と、国境を越えたグローバルな女性解放の潮流への発展は、まさに諸階級・諸人種の女性による広範な参与があったからこそ可能となったのである。ジェンダーに基づき、多様な階級の女性たちの利益と葛藤を含んだこの複雑かつダイナミックな奔流は、到底「ブルジョア」という一語の定義で括りきれるものではない。では、中国における女権運動の実態はいかなるものであったのか。もしそれが 20 世紀初頭に出現していたとするならば、その社会歴史的要因は何であったのか。どのような政治社会的条件下において、女性たちの自発的な社会運動は成立し得たのか。いかなる人々が、どのような目的のためにフェミニストとなったのか。彼女たちはいつ、なぜ歴史から姿を消したのか。そして、中国の女権運動は米国のそれと比較して、どのような共通性と相違点を持つのか……。次々と湧き上がるこれらの問いに私は魅了され、博士論文のテーマをこの領域に定めることを決意したのである。

1992 年夏、私は生後一ヶ月の娘と二歳の息子を連れて故郷の上海に戻り、13 ヶ月間にわたるフィールドワークを開始した。博士論文の予備調査の段階で、20 世紀初頭の北京、天津、上海、広州といった大都市ではフェミニズム活動が極めて活発であったことを把握はしていた。しかし、帰国して調査を行うにあたって一切の助成を受けておらず、他の地方へ赴くための資金が決定的に不足していた。また、授乳中の乳児を抱えていたことも、遠方への調査を困難にしていた。こうした客観的条件の制約から、私は研究対象の空間的範囲を縮小せざるを得ず、上海に根を下ろして調査を展開することとなった。

米国女性史における優れた著作の数々が、書簡や日記といった豊富な個人資料に基づいていたことから、私も当時のフェミニズム活動家たちの個人資料を発掘し、彼女たちの内面世界を深く探究したいと考えた。そこで、上海図書館や歴史博物館など史料を収蔵する各機関を遍歴し、女性の個人資料の有無を照会

した。しかし、私の問いを聞いた担当者たちは一様に、怪訝さと蔑みの混じった表情を浮かべ、「当館では女性の資料などは収集しておりません」と答えるのみであった。上海図書館の職員に至っては、「当館で収蔵しているのは孫文や魯迅といった著名人の直筆書簡だけです」と告げた。私は自らの不明を恥じた。米国での生活が長すぎたあまり、自国の実情を失念していたのである（米国では 1960 年代のフェミニズム運動以降、女性たちが自発的に資金を募り、全米各地に女性アーカイブを設立してきた。これが米国女性史学の隆盛を支える基盤となっている）。私は方針を転換し、存命の女性活動家へのインタビューに活路を見出すことにした。上海での人脈を辿った末、幸運にも 1900 年から 1907 年生まれの当時の女性活動家たち数名に辿り着き、彼女たちは私のインタビュー要請を快諾してくれた。口述資料を主要な史料に据えるという選択は、当初の計画にはなかったものの、行き詰まりの中で見出した別の道であった。

これら高潔な老婦人たちが語る歴史的叙述は、私に強い衝撃と震えるような感動をもたらした。解放以前の中国において、これほど広範な職業婦人群が、すでに自覚的に女性解放を追求していたのである。婦人の社会的地位向上という多難な道程において、これら傑出した女性たちが打ち立てた業績を、私は今日まで露ほども知らずにいた。明白であった。私が対峙しているのは、歴史の表舞台から抹殺された集団であった。1920 年代から 30 年代にかけて一世を風靡したこれらの知識人女性たちは、今日の自らの境遇を冷徹に認識していた。そしてその中には、歴史の闇に埋没することに抗い続ける人々がいた。1930 年代に雑誌『女声』を創刊した主編・王伊蔚（おう・いい）は、自らのために一枚の墓碑を用意していた。そこには友人に依頼して認（したた）めた碑文が刻まれており、かつて共に婦人運動に身を投じた同志たちの姓名と事跡が記録されていた。この碑を通じて、後世の人々に自分たちの世代の奮闘の軌跡を伝えたいと願ったのである。彼女たちの自叙をこの耳で直接聴き得たことを、私は切に幸運に思う。私の使命とは、この偉大なる女性たちの世代のために、彼女たちの生にふさわしい「墓碑銘」を書き上げることにあるのだと、確信するに至った。

米国への帰途、私の心境は不安に揺れていた。史学博士論文において、オーラル・データを主要史料に据えて執筆された例を、それまで目にしたことがなかったからである。「果たして、指導教官たちはこれを受け入れてくれるだろうか」という懸念が頭をよぎった。しかし、執筆への衝動は抑えがたいほどに強烈であり、「もし拒絶されたとしても構わない。遅かれ早かれ、私は彼女たちの物語を書き上げるのだから」と、半ば開き直るような覚悟でいた。ところが、予想に反してスーザン・マン教授は、私のインタビュー録音の英語翻刻稿を読み終えるや否や、直ちに面会を求めてきた。彼女は分厚い翻刻稿の束を手に、興奮を隠しきれない面持ちで私に告げた。　「王政、これこそがあなたの博士論文です！」　指導教官の承認と支持を得たことで、私はその後の半年間で論文の執筆と学位請求論文審査（ディフェンス）を完遂した。その後、私は慌ただしく中国へ戻り、フェミニズム活動に身を投じることとなった（第四回世界女性会議の NGO フォーラムへの参加、およびフェミニストの仲間たちとの一連の活動の組織化など）。後に知ったことであるが、マン教授は私の博士論文を、そのままカリフォルニア大学出版局へと強力に推薦してくれていたのである。

行動を通じて中国フェミニズム史を継承する

1992 年から 1993 年にかけて中国国内でフィールドワークを行っていた当時、「フェミニズム（女権主義）」という言葉は、公に認める者など誰もいないほど否定的なニュアンスを帯びた蔑称であった。その

ため、私は中国フェミニズムの歴史を研究している身でありながら、公にはその語を用いることを控え、あくまで「初期の婦人運動活動家を訪ね歩いている」と説明するにとどめていた。しかし、驚くべきことに、いざインタビュー対象の老婦人たちと対話を始めると、彼女たちは当時のフェミニズム活動について何ら忌憚（きたん）なく語り出したのである。94 歳の陸礼華は私にこう語った。「私は女権運動同盟会や婦女参政協会など、十数もの婦人団体に参加しました。婦人の利益を図る組織であれば、どこへでも赴いたものよ」 「女性の権利は勝ち取るべきもの！ 争わなければ手に入らないわよ！」また、1930 年に法律事務所を開設し、しばしば無償で女性たちの訴訟を引き受けていた 93 歳の朱素萼は、若き日の職業選択について力強く語った。「私はまさに、女性の権利を伸張させるために法律を学んだのです」。疑いようもなく、これらの活動に従事した女性たちにとって「フェミニズム（女権）」という言葉は特別な意義を宿していた。今日の公式言説がいかにこの語を貶めようとも、彼女たちに新たな覚悟と力を与え、「新女性」へと脱皮させたフェミニズムという思想を、彼女たちは終始一貫して慈しんでいたのである。これらの歴史の証言者を前にして、「フェミニズムは中国の国情に適合しなかったために失敗した」などと断じることは到底不可能であった。むしろ、歴史的変革の当事者たちは、私に明白な事実を突きつけたのである。すなわち、一世紀以上にわたり、数世代の中国女性が自らの解放のために、男尊女卑が根深く浸透した家父長制社会（男権社会）において、あらゆる側面のジェンダーの障壁を打破せんと奮闘してきたという事実である。中国女性の発展と進歩は、女性たちが自ら勝ち取ったものであり、決して誰かから恩賜（おんし）されたものではない。近代以降の中国における社会文化の巨大な変革を、身をもって推し進めたのは、まさにこれらの「新女性」たちであった。ただ、その歴史が隠蔽され、「フェミニズム」という言葉が汚名を着せられたに過ぎない。この隠蔽と汚名化のプロセスを解明することこそが、私の解き明かすべき歴史の謎となったのである。

疑いようもなく、私自身のジェンダー・アイデンティティは、老婦人たちの叙述に耳を傾ける際、強烈なエンパシーを引き起こした。インタビューを終え、夕闇が迫る街路を自転車で縫うように走る時、私の思索と感情は、いま聞いたばかりの人生の物語の中に深く沈殿したままであった。それは、溢れる涙を抑えることなく、感情を存分に吐露できる貴重な時間でもあった。彼女たちの人生における辛苦や悲喜こもごもに心を動かされたのみならず、何気なく語られるディテールが、しばしば私に決定的な開眼をもたらした。弱冠 22 歳にして「両江女子体育専科学校」を創設した陸礼華は、同校に女子バスケットボール部を設立した際の逸話を語ってくれた。彼女はそれまでの長袖に提灯ブルマーという運動服を廃止し、女学生のために白い襟付きの半袖と赤い短パンのユニフォームを特注したのである。その姿で上海在住の外国人女子チームと試合を行ったところ、瞬く間に上海中を揺るがすスキャンダルとなった。世論は一斉に、両江女子バスケ部の服装を「胸や腕、太ももを露出させている」「風紀を乱す破廉恥な行為だ」と非難したのである。このエピソードをユーモアを交えて語る老婦人を目の当たりにし、私は心の中でこう呟いた。「あなたと、あなたの世代の女性たちの勇気のおかげです。さもなければ、私は今でも長袖長ズボンでプールに入らなければならなかったでしょう」と。こうした連想は、インタビューの端々で常に沸き起こった。彼女たちのような「女傑」世代が関門を突破し、境界を越えていった数々の行動は、後輩である私が享受している多種多様な自由と密接に繋がっていたのである。言いようのない感謝の念が、私の内に自然と湧き上がった。

先学が植えた大樹の陰で涼を享受する後輩として、私の歴史的責任とは何であろうか。歴史学者として、私はフェミニズムの先駆者たちの歴史を叙述することを自らの使命と定め、中国フェミニズムの「家

系図」を丹念に整理し、広く世に知らしめることに努めてきた２。 「フェミニズム」の名誉を回復するためには、まず自らが「カミングアウト」しなければならない。白髪の「五四新女性」たちの存在に背中を押され、私はそれ以来、中国国内のあらゆる公的な場で、自らがフェミニストであることを誇りを持って宣言するようになった。当然ながら、真に先駆者たちの期待に応えるためには、我々後輩もまた行動を通じてフェミニズムの歴史を書き継いでいかねばならない。したがって、私の目標は単に中国フェミニズム史を「書く」ことにとどまらず、フェミニズム史を「実践する」ことへと向けられた。私のフェミニズム活動自体は1989年に端を発するが、五四運動期の先駆者たちとの邂逅は、私の人生の目的をより明確かつ確固たるものにした。もし「書く」だけで「実践する」ことができないのであれば、先駆者たちに対して申し訳が立たないという思いが常にあった。ゆえに、博士論文を完成させてからの30年間、私はその時間とエネルギーの大部分を、中国国内におけるフェミニズム学術の推進に捧げてきた。具体的には、フェミニズム著作の翻訳出版、国際シンポジウムの組織、大学教員養成コースや博士課程プログラムの開催などを通じ、大学における「女性学およびジェンダー研究」の確立を支援してきたのである３。本書の読者諸賢には、私がなぜこのような形でのフェミニズム実践を選択したのかをご理解いただけるであろう。博士論文の研究を通じて、私は20世紀初頭におけるフェミニズムの言説が、中国の近代社会への移行を推進する上でいかに決定的な役割を果たしたかを痛感した。想像してみてほしい。もし20世紀に「新女性」たちの出現がなかったとしたら、今日の中国はどのような姿をしていただろうか。対照的に、20 世紀末における中国の男性知識人層の凋落——彼らは、フェミニズムを提唱することを誇りとした先学たちの立場を放棄し、あろうことかフェミニズムを排斥・反対する主勢力へと転じた——は、世紀末の女性知識人たちがフェミニズム言説の再興と発展に邁進せざるを得なかった社会歴史的背景を形作っている。そして今日、このフェミニズム言説の展開が目指す目標の一つは、21 世紀における「新男性」の誕生を呼び起こすことにある。

三十載（さんじゅっさい）を経て語る本書の長所と欠点

本書の欠陥は、当時の調査研究における限界と密接に関わっている。前述の通り、資金不足と母親としての責務による制約は、20 世紀初頭のフェミニズム運動の全容を解明するという当初の調査計画の遂行を不可能にした。1949 年に大陸を離れた多くのフェミニズム運動の中心人物を訪ねて台湾へ赴くことも叶わず、南京の中国第二歴史档案館で国民政府の公文書を閲覧することすらできなかったのである。上海でのフィールドワークの大部分において、私は徐家匯（じょかかい）蔵書楼〔1847 年に開館した中国初の近代図書館〕に籠もり、1949 年以前の旧い新聞や雑誌の中にフェミニズム運動の微かな痕跡を求めて没頭していた。その結果、目にしたのは五四運動期における「婦人問題」に関する膨大な議論の山であった。当時、私が読んだ五四運動に関する英語圏の学術著作は、どれも女性について言及していなかった。最も包括的な古典的名著として尊ばれる周策縦（シュウ・サクジュウ）の『五四運動史』（*The May Fourth Movement: Intellectual Revolution in Modern China*）でさえ、女性に触れているのは極めて簡略な一段落に過ぎなかったのである。それゆえ、蔵書楼で「婦人問題」に関する長短取り混ぜた論考が（その多くが盗用や受け売りであったとしても）文字通り溢れている光景を目の当たりにした時、私は実に深い驚きを覚えた。そして突如として悟ったのである。これまでの歴史学者が五四運動を研究する際、山積する婦人問題関連の言説をあえて「脇へ押し退ける」ことで初めて、自らの関心事である「女性なき重大

なテーマ」に焦点を絞ることが可能であったのだということを。これはすなわち、私が先学の記述とは異なる五四運動期の姿を発見したことを意味していた。しかも、私が見出した歴史を実証する第一次史料は、拾い上げればきりがないほど身近に存在していたのである。この事実は、私を大いに高揚させた。

博士課程在籍時、私は歴史学を専攻しつつも、当時の米国アカデミアで席巻していた諸々の批判理論に深い関心を寄せていた。とりわけ、ポスト構造主義における言説の理論的解釈は、社会・政治・文化現象を分析するための卓越したツールであり、特定の歴史的文脈における主導的な言説と人間の主体性の構築との相関関係を探究する上で、極めて有効な手法であると考えていた。蔵書楼での文献調査において直面した、圧倒的なまでの「五四新文化フェミニズム言説」の奔流と、その直後に幸運にも巡り合うことができた「五四新女性」たちの存在――。これら両者は、ポスト構造主義理論という背景の中で有機的な結合を遂げた。その結果、私は大きな困難を伴うことなく、一次文献資料と口述資料（オーラル・マテリアル）を組織化し、分析するためのフレームワークを設計することができたのである。すなわち、「言説」が形成された歴史的背景を文献テキストによって記述し、一方で「新女性」たちの自叙伝的語りを通じて、フェミニズム言説がいかに彼女たちの主体的なアイデンティティ構築に関与したかを検証するという手法である。このようにして本書は、フェミニズム言説と「新女性」集団との相関、および両者の相互作用がいかにして 20 世紀中国の社会文化的変革に寄与したかを追跡することを主軸に据えるに至った。

本書に登場する主人公たちは、学業、キャリア形成、経済的自立、婚姻の自主性といった面で共通の特質を備えているのみならず、多かれ少なかれ、組織化された多様な婦人社会活動に関与していた。社会的な責任を負うこともまた「新女性」の重要なアイデンティティであった。ゆえに、多角的かつ組織的な婦人活動の諸相は、本書における一つの副線を構成している。しかしながら、調査範囲の制約により、中華民国期における多様な女権運動を体系的に提示するには至らなかった。この結果は、博士論文の当初の構想からは乖離するものであった。とりわけ悔やまれる点は二点ある。第一に、当時もし調査の地理的範囲を拡大し、北京、天津、広州、南京を巡り歩くことができていれば、存命であったより多くのフェミニズム運動の指導的人物に邂逅し得た可能性があったことだ。そのような口述資料が得られていれば、組織化されたフェミニズム運動の系譜をより明瞭に解き明かし、組織内部の運営メカニズムや内部対立、葛藤を深く理解することができたであろう。それは同時に、20 世紀末の大陸に再び出現したフェミニズム団体の活動にとっても、歴史的なリファレンスとなり得たはずである。幸いなことに、21 世紀に入り、英語圏および台湾の学術界から民国期のフェミニズム運動に関する歴史的著作が相次いで刊行されている。関心のある読者諸賢は、それらの論考を通じて、当時の多岐にわたる組織的な女権活動について、より深い知見を得ることが可能である。

第二の遺憾な点は、本書における中華民国期の婦人運動に関する史料が、1980 年代に全国婦女連合会（婦聯）より刊行された『中国婦女運動歴史資料』に多くを依拠している点であるが、この史料集は主に共産党指導下の婦人運動の資料を収集したものであったため 4 、結果として本書における国民党・共産党両陣営の婦人運動の描写に不均衡が生じることとなった。当時、共産党の地下組織が国民党統治下の多種多様な婦人団体に広範に浸透していた事実はあるものの、執政党たる国民党内のフェミニストによる組織的行動は、当然ながらより大きな勢力を誇っていた。本書の語り手の一人である朱素萼は、かつて国民党上海市党組織婦人運動委員会の幹部メンバーであった。もし当時、私が国民党側の婦人運動史料により多く接することができていれば、朱素萼の口述資料との相互照合や深掘りが可能となり、国民党側の運動についても、より史実に即した目配りができたはずである。こうした英語原著における不足を

補うべく、今回の中国語版では 30 年以上前の朱素萼のインタビュー録音を改めて聴き直し、彼女による国民党婦人運動の記述を大幅に拡充した。録音を聴き返すたびに、当時の自身の学術的準備やアーカイブ調査が不十分であったために、これらの「生きた歴史アーカイブ」を前にしながら、婦人団体の活動についてより深層に迫る問いを投げかけられなかった好機の逸失を、痛恨の極みと感じる。学術著作とは、常に特定の歴史的背景の産物である。存命であった当事者たちに対し、民国期の女権組織活動についてより深く探究し得なかったという今日の後悔は、実のところ、私自身が過去数十年にわたりフェミニズムの実践において直面してきた数々の挫折に起因している。実践者としての立場から、先駆者たちにその経験や教訓を真摯に仰いでおくべきであったという後悔である。当時はまだフェミニズム運動の実践経験に乏しく、未熟であったがゆえに、練達した問いを立てることが叶わなかったのである。

数々の遺憾な点は残るものの、先駆者たちの口述録音を改めて聴き返す時、その価値の計り知れなさを痛感せざるを得ない。新女性たちが自らの類まれなる人生経験を語った史料は、もはや二度と手に入れることはできないからである。彼女たちの豊かな歩みが私に与えてくれた啓発や感銘は、多岐にわたる。英語原著においても、これらのインタビューが私の認識にいかに多大な収穫をもたらしたかを記述したが、今日これを読み返し、本書が扱う一つの論点について、より明晰な叙述と深い考察が必要であると感じている。すなわち、「フェミニズム言説（女権主義話語）」と「フェミニズム運動（女権主義運動）」の相関関係である。これら相互に関連し合う二者は、重なり合いながらも明確に区別される。フェミニズム言説が生成される場は往々にして知識・文化界にあるが、フェミニズム運動は、いかなる課題を巡るものであれ、フェミニズム言説の「効果」であると同時に、その言説を強力に伝播し実践するための「回路・手段」でもある。組織的な女権活動に身を投じる者は、必然的にフェミニズム言説に浸潤しているが、フェミニズム的な覚醒を遂げた者がすべて組織的活動に加わるわけではない。本書に登場する新女性の中には、朱素萼弁護士のように、組織的活動と自身のキャリア形成を両立させた者もいれば、より多くのエネルギーを自身の専門職に注いだ者もいる。彼女たちが職業を選択した目的は、自己の発展（経済的自立を通じた、男性に依存しない自律的な生の実現）のためであると同時に、女性の社会的進歩を促進するためでもあった。例えば、陸礼華や陳詠声が女子体育教育の発展に挺身し、王伊蔚が女性誌の刊行を選んだようにである。フェミニズム的な覚醒を遂げた職業婦人たちが、20 世紀前半の中国における社会文化的景観を根底から変容させた事実は、組織的な女権運動に劣らぬ歴史的役割を果たしたと言えるだろう。より正確に言えば、フェミニズム組織は各専門領域で奮闘する新女性たちに「連帯の場」を提供し、職業婦人たちはまたフェミニズム組織の諸活動を支える重要な担い手であり、資金源でもあった。民国期において、両者は互いに依存し合う関係にあり、共にフェミニズム言説を実践していたのである。フェミニズム的な覚醒さえあれば、組織的活動を通じて諸権利を勝ち取ることもできれば、それぞれの社会的立脚点において家父長制社会（男権社会）を解体・変革する作業に従事することもできる。これこそが、フェミニズム革命が武力に訴えることなく、人類史上、異なる政体下においても深刻な社会文化的変革を引き起こしてきた奥義であり、フェミニズム言説を伝播・発展させることの重要性もまたここにある。21 世紀を迎え、フェミニズム的な覚悟を持った知的女性たちが、言論に影響力を持つ地位を占めるようになりつつある。たとえ特定の時空間において組織的な女権運動が制約を受けたとしても、フェミニズムによるさらなる深層的な社会文化の改造は、必然的な潮流なのである。

本書に登場する五人の語り手たちは、それぞれに異なる人生の軌跡を歩んできており、読者諸賢はその中から多種多様な感興を得られることであろう。当時のインタビュー内容を可能な限り忠実に再現する

ため、また中国語版ではより大きな分量を割くことが可能であったため、私は膨大な時間を費やし、英語原著からの翻訳ではなく、録音テープに基づき全口述記録をゼロから再構成した。五人の語り手は、それぞれ青浦（上海近郊）、常州、湖南（二名）、福建の出身である。前二者とは呉語（上海・江南地方の方言）で語り合い、後三者とは訛りのある普通話（標準中国語）で対話した。私は文字原稿において、彼女たちの方言の特色を極力忠実に再現し、その「生きた響き」を損なわないよう努めた。これにより、性格も表現スタイルも三者三様な「新女性」の先駆者たちの個性を生き生きと感じ取り、彼女たちが時代の荒波を駆け抜けた若き日の姿を想像していただけるものと信じている。同時にそれは、20 世紀前半、地方の恵まれた環境にあった若き女性たちが、学問を求めて単身上海を目指した歴史的潮流をも描き出している（唯一、黄定慧のみは共産党から地下工作のために上海へ派遣された例外的存在である）。たとえ私が上海を離れて調査を行うことが叶わなかったとしても、地方出身の先駆者たちの存在は、20 世紀初頭にフェミニズムがいかに中国各地へと波及していったかという光景を、我々の目の前に鮮やかに提示してくれているのである。

十数年前、中国国内で女性史を講じる必要に迫られた際、私は二人の若手研究者に依頼して原著を中国語に翻訳してもらった。その訳稿の電子版はネット上で共有され、一定の広がりを見せた。しかし、今回正式に刊行される中国語版は、その電子版とは大きく異なっている。口述部分の再構成や校正・誤脱の修正に加え、私はいくつかのキーワードについて、歴史的背景に照らした再翻訳を行った。例えば「gender equality」という語について、「ジェンダー平等」という訳語が中国語圏にいまだ出現していなかった時代背景を考慮し、具体的な文脈に応じて「男女平等」あるいは「男女同権」と訳し分けた。同様の原則に基づき、「women」も時代背景に合わせて「婦人」「女子」「婦女」「女人」と訳し分けている。また「女性」という語については、五四運動以降の特定の文脈においてのみ使用した。言葉の変遷は、社会文化の変容を如実に反映している。読者諸賢におかれては、特定の歴史的背景における多様な用語の使い分けに留意して読み進めていただくことで、歴史への理解をより深めていただければ幸いである。

原著の注釈に引用されている膨大な英文学術著作の多くは、中国語圏の読者にとって直接的な関連が薄いことを考慮し、直接引用されているもの以外は、中国語版の注釈からは割愛し、参考文献一覧（ビブリオグラフィー）に留めることとした。同時に、改訂されたこの中国語版では、原著の出版年（1999 年）以降に刊行された書籍も引用している。読者諸賢の混乱を避けるため、ここに付記しておく。

三十数年前、五四運動期の「新女性」たちと邂逅したことは、私のその後の半生に深遠な影響を与えた。彼女たちの人生の物語をここに読者と共有できることを、心より嬉しく思う。諸賢が私と同様、これらの物語から単なる歴史的知識を得るにとどまらず、社会を変革するための力と勇気をも汲み取っていただけることを、切に願ってやまない。

王政
2025 年 2 月 25 日

注釈

1. 拙著『女性的崛起：当代美国的女権運動（女性の蜂起：現代アメリカのフェミニズム運動）』は、1995 年に当代中国出版社より初版が刊行され、改訂版が 2025 年に後浪出版公司より出版された。アメリカ女性史を学んだことが私個人の認識にいかなる転換をもたらしたかについては、同書に

おいて詳述している。

2. マリリン・ヤング教授が提起したもう一つの問い「共産党に参加したフェミニストたちの運命はどうなったのか？」について。本書では共産党員・黄定慧（こう・ていけい）の長大な自叙伝的叙述によってその一部を回答しているが、私は本書の完成後もこの問いへの答えを追い求め、2016年に中国フェミニズムに関する第二の英文専著 *Finding Women in the State: A Socialist Feminist Revolution in the People's Republic of China: 1949-1964*（カリフォルニア大学出版局）を上梓した。その中国語版は、香港中文大学出版社より『尋找国家中的婦女：社会主義体制中的国家女権主義（1949-1964）』（国家のなかの女性を探し求めて：社会主義体制における国家フェミニズム1949-1964）の書名で近刊予定である。
3. 私のフェミニズム実践やその他の学術的業績に関心のある読者は、個人ウェブサイト（https://sites.lsa.umich.edu/wangzheng/）を参照されたい。
4. 中華全国婦女連合会婦女研究所と中国第二歴史档案館の共編による『中国婦女運動歴史資料』（中国婦女出版社、2011 年）の「民国政府編（全二巻）」は、1980 年代の史料集に見られた偏向を是正し、共産党系以外の婦人運動に関する貴重な史料を数多く収録している。